



8月初め、台湾の有名な科学財団が主催する大学生・大学院生と高校教師対象のサイエンスキャンプに、講師として招かれました。台湾中部の海拔 1200m の山間部に国立台湾大学 (NTU) の広大な演習林があり、その敷地内には森林見学のための遊歩道の他、このような集会や会議のための施設やホテルなどが整備されています。サイエンスキャンプの今年のテーマは「気候変動—地球の未来と人類の命運」という大きなものであり、私は、地球温暖化と Future Earth の話題も含めて講演することが期待されていました。毎日 3~4 人が講演し、その後質疑を行う時間がたっぷり用意されていました。私以外の講師は、中国科学院や、国立大学学長、前学長も含め、気候変動とその影響や環境・エネルギー分野を代表する研究者ばかりでした。受講生は台湾以外に、中国本土や香港・マカオからの十数人を含めてちょうど 100 人で、すべて、各大学などからの推薦で選ばれた学生とのことでした。

さて、私は朝一番 1 時間の講演をした後、質疑を受けましたが、まず数人から一斉に手が挙がって、びっくりしました。ほぼ同じネタでの講演を日本のいくつかの大学でもやってきましたが、司会が質問を促してもほとんど手が挙がらないのが、普通だったからです。30 分の質疑時間はアツという間になくなったため、司会者が「後は休憩時間にやってください。」と言って打ち切って終わったとたん、すぐ 10 人近い学生が私の周りに集まり、再び質問攻めとなりました。分野が違うためによくわからないという初歩的な質問から、「先生は(地球環境問題解決のために)アジアでの連携・協力が重要といわれたけど、政治や社会の体制が大きくちがうアジアで、具体的にどうやれると思いますか？」など、私自身も非常に気にしている問題をずばり聞いてくる学生もいて、感心してしまいました。学生たちと問答しているうちに、コーヒーを飲む時間もなく休憩時間の 30 分は終わってしまいました。

さらに、午後の 2 時間は、2 会場に分かれてその日の講師を囲んでの懇談会が設けられ、そこでもまた、学生たちとの質疑が延々と続くことになりました。その時も、司会の研究者は、次々と出てくる学生からの質問を調整するのに苦労していました。昼食と夕食は、広い食堂で、10 人程度が一つの円卓を囲んで取りますが、講師は必ずどこかの円卓に入り込んで、学生たちと食事を一緒にすることになっていました。その日は「うちのテーブルに来てください」とのお誘いを複数で受けて、うれしい悲鳴を上げた次第です。

台湾や香港では、この 1~2 年間、学生たちの活動が政治を大きく変えてきたことをニュースで聞いていましたが、今回の経験で、納得がいきました。疑問に思ったことは声に出し、そして必要な行動を取るという若者らしさを、久々に感じた爽やかな旅行でした。